

2015/8/1

しろひげ@Kurobane です。

8 月になりました。

敗戦の日から 70 回目の夏です。

「戦争が終わって生まれた子どもたち」の一群である私ですが、今年のことさら親の時代と自分の来し方、子どもたちのこれからに思いをはせる1か月になりそうです。

数日前から、我が家に現れた屈託のない孫の姿が、さらに私をそうさせているのかもしれない。

山田誠也(後の山田風太郎)が著す一連の日記、『戦中派 焼け跡日記』、『戦中派 闇市日記』を、この夏休みの私の課題図書にしています。

医学生であった一人の青年が向かい合う戦争の実相は、小説家としての可能性をうかがわせる豊かな表現と相まって、鮮やかに私に伝わってきます。

終戦の前日、8 月 14 日の日記に山田青年は、「個」を潰してきた日本の社会に対する痛恨の念を記しています。

個人の尊厳を無視し、国が狂気に走る恐ろしさは、全体主義が支配した戦時中のこととして読み流すことができません。

そして、あの夏の 8 月 16 日、風太郎(誠也)は敗因を分析し、記しました。
日本人は「なぜか？」という問いをもたなかった、と。

この国に「『精神』に泥酔し」、「『言葉』に踊り狂う」、「狂信の時代」があったことを、この日記は伝えています。

誰一人として

「わたくしが戦いをはじめました」って

云い張る人はいないよ。

みんな、

「戦になってしまつて」とか、

「戦が起きてしまって」とか、
云っているよ。

井上ひさし 『花よりタンゴ』より

そして、私に決意を促すのは、鷹羽狩行の代表作、〈天瓜粉しんじつ吾子は無一物〉
です。

何も持たずにこの世に生まれてくる 2 番目の孫のために、私は再び「だまされる罪」を犯
すまいと心するのです。

いささか生硬な月初めのあいさつになりました。
皆さんにとっていい夏となりますように。

黒羽根整形外科
黒羽根洋司